

へ書評

宮崎道生 著

「折たく柴の記釈義」

佐藤 和夫

一 本書の意図

証史上の人物を証史家が研究対象とするのは二つの意味がある。一つは証史的人間が出現した時代の環境についての関心からであり、二つは証史的人間が証史的時代環境に如何に作用したかという関心からである。勿論二つの考え方が相即不離の關係にあり、相互に作用し合つて証史を形成してゆくことは言うまでもない。しかし、いかに秀れた個性的人物が証史の上に登場しても、証史家が史料を発掘、考証するだけでは事実の羅列に終始する結果になりかねない。人物史、思想史研究の難しさは、如何に個性を内面的なものから外面的なものへと引き出し、讀者、研究者に訴えることができるかという点にかかっている、といえよう。著者の証史的個性に対する愛情がなければ、その奥深く人物史研究は挫折しかねない。

昭和三十九年六月、本研究会を育成されてきている弘前大学教授宮崎道生博士によって、新井白石の自序伝として著名な「折たく柴の記釈義」が出版刊行された。宮

崎博士は既に本書の附録の關係文獻の項に示されているように（六一の頁）「新井白石序論」、「新井白石と日本証史新書」、「新井白石の研究」、「新井白石と典型日本人」（吉川純一）所収の著書を公にされており、その學術的評価は東京大学より文学博士の学位受領によって示された。関係論文だけでも十四論、なお本書刊行後に発表された論文等を加えると更に多くなる。「折たく柴の記」の釈義を行える証史學者として宮崎博士を得たことは新井白石にとっても、私達一般讀者、研究者にとっても喜ばしいことである。私も本書を讀み、博士が序に述べられているように「白石の父が畏敬の念と親愛の情とを以て描かれている。私は本書を讀んで、白石の父が始終に際し、目を開いて白石を見、白石の手を取って眼をひきとつた」というくだりに至る毎に、巻を捲いて讀み、これを久しう吐き出すのをやめないものである。白石といふ、鴉外といふ、衷心、敬愛すべき父をもつたことは、人間として無上の倖せであつたと思ふ。という感想は、著者の白石に対する愛情が

なければ表現しえない一節である。しかし、感情におぼれず、冷靜な歴史家としての態度で廻んでいることは次の文章に象徴的である。

「自序伝が長所と短所を併せもつことは、一般の常識である。白石は、幕府では鬼としておそれられ、知友の間でも自戕の強さと自慢癖とによつて必ずしも喜ばれず、晩年は孤独の寂しさを味わざるを得なかつたので、本書にも嫌味な個所がないではないが、嘲学によつて仁心をやしなうと共に、他方、少壮の日から苦難をなめつづけ、ゲーテのいはゆる涙を以てパンを食べた人だけに、その心情には深さと同時に暖か味とがあつて、読者の感動をさそうところが少くない。本書の底流をなすものこそは、心の奥深く湛えられた白石のヒューマニズムであると、私は判断する。」（四八頁）これはそのまゝ、宮崎博士のヒューマニズムでもある。

二、構成

本書の表題を「定本初稿に於ける柴の記釈義」（傍吳筆者）としてあるように新井清氏所蔵の白石自筆本を底本とし、著者二十坪の準備期間をおいた成果である。それ故に単なる自序伝としてでなく、宝永、正徳期の信頼すべき政治史である奥から、學術的立場から善本の公刊を意図し、又すぐれた古典の一つとして一般読書人の関心を引くを得るような書でもあるから、正しい内容の把握と天才

白石個人についての関心を深めるような註釈書を世に紹介する必要を抱きつづけていたというだけあつて、詳細、周到な註釈書である。同時に解説を付して一般読者に平明に理解され易く配慮されている。

本書の構成は、大きく總説と序、巻上、巻中、巻下の三段に分けられた本文、そして附録となつてゐる。總説では、時代的背景、書名の由来、執筆の動機と年時、形態と資料、構成と内容、伝承と流布、結語となつており、結語中「初稿に於ける柴の記」が他見をゆるさぬ建前で書かれているから、白石個人の感情があらわにされてゐるに近親の綾達には多少美化が伴い、將軍家及び家継の代の政治の説明には潤飾が加えられることは当然あり得ることである。後者に關する政治的印象をそのまま六、七代の政治的評述にうつすことは危険としなくてはならぬ、と警告している。本文は内容に即して便宜上二つに区分へ序、祖父田および父世の手蹟、白石の出生および幼少年期、青年期の白石、大名家への出仕、幕府政治への参与（一・二）、白石の致仕（三）、更に小区分して一五二段に細分し、それぞれに内容に即して見出しを付している。私達が一般的な註釈書を見てとまどうのは、どこで区切りがついてゐるのかわからない場合である。その奥、本書は二三行の本文を一段としてゐる部分もあつて、微視的と思える位、細分されてゐる。このような著者の配慮は、専門學者にかぎらず一般読者にも利用し得

ることを考慮しているだけあつて全巻を通じて見られる。本文は巖窟に校訂され、各段毎に「釈」を附し、大節分には「解説」が行われ、巻上中下に十二項に及び「補説」が設けられている。他に余説「晩年の白石」があり、白石の一生を余すところなく述べている。本書が単なる註釈書でなく學術的評価にたえる専門書としての価値を有すると共に、一般読者にとつて江戸時代の研究入門書である奥に特徴を有するのは、以上のような構成の仕方による。

三、序、巻上

新井家の祖先は新田氏といわれるが、徳川家自体において偽系図の作成を認める程であるから新井家自体疑わしい。著者は巖窟な考証批判を行っているが、はつきりした結論は得られていない。ただ「白石自身」が、その祖先を清和源氏で新田の支流であるとの意識のもとに生きつづけた事実是否定できないし、かつそれが子孫に与えた影響感化もまた軽視できないところであらう。「一一段」と述べているのは思想史研究の上から傾聴すべきである。このような著者の態度は白石が父の事を敘した段で「白石の墨筆は墨筆として、やはりそこに眞実が含まれていることは否めないところであらう」(「一一段」七六頁)というのと軌を一にする。本書は祖父田および父田の事蹟から白石の出生及び幼少年期、青年期そして細

吉の後を継いで將軍家宣となつた甲府侯綱盛に出仕して頭角をあらわす、いわば苦難の時代である。それだけに人間、白石としての面目がさわだつてゐる。著者の解説もそのような人間性に着目し、學術論文では触れ得ない人情の機微を余すところなく伝えている。母の事へ二〇段「では「學問上の事」について白石が母を頼りとし、その學問上の志望を打明けたのも尤ものこととなすけるし、同時にどういふ信頼を寄せ得る何ものがあつたのかもあらう」(「少青年時代の白石」或は、母に似て色も白く髪も厚がつそうにしてゐたのではあるまいか」と推測されている。白石が家庭について記すことが少なく、それについて、山崎夏山が「吾人は嘗て折楚柴の記を読んで白石の自序伝にすら妻の事を記せしものなさを怪しみたりき。『但休集』を読むに及んで、何事も頭はにして磨はざる彼すらも、亦其家庭の事に於ては、記すこと極めて少なきに驚かざるを得ず。彼等は一杯の盞を履めり。丈夫の品性を陶冶すべき「ホーム」の消息を伝ふことを忘れたり。彼等は自己の家庭は即ち自己の一半を這れる者なることを忘れたり。」と酷評しているが、夏山はフリスチャンであるし、白石は典型的な儒学者であるから時代的に家庭観が異なるのは致し方ない。しかし、母を尊重することは儒教道德の根本理念の一つであるから表現の多少には關係ない。著者はこの奥について男尊女卑ときめつける勝田勝年氏の説を否定した。夫人につい

ても「不如意な経済状態の中で、中年以後、病氣がもと
なつて夭折を遂げ、四人の子を育て上げた主人の陰の
力は、見落されてはなるまい」と廣く同情の目を注いで
おられる。(補説四、白石の家庭・家計二一頁)。同
じことは父の終焉の解説(二十四段)でも「武士の外見
は、大地を蔽う冷たい雪にたとえられるが、その心持の
温かさは雪の下の大地的それにも比せられる」というこ
とからもうかがえる。

少年期の白石の修學について(二十九段)睡氣をほら
うために冷水をびぶって勵んだことが、かつての国定教
科書(小學修身書卷五)では、強固な意志をきたえる目
的で取り入れられていた。しかし戦後、この習字と如實前
田侯への就職口を友人に譲つて事業の二つが、小學生に
よつて水をかぶるのは非能率的(要領が悪い)、不合理
である、と受けとられたということについて、著者は時
勢の急転として歎かれてゐる(二九段解説)。現今のよ
うに四当五落とか云つて、將來の出世の爲めにガリ勉を
して自己の人間性を失つてゐるのを見れば、戦前の教科
書の採沢の仕方趣旨が正しく受け取られていないとい
う著者の訴えは当然かも知れない。しかし、白石のみに
ついていへばどうかかも知れないが、戦前の教育方針全
體から見わたした時、戦後の評價も又止むを得ないので
はないかと考える。著者の時代観がうかがえる唯一の段で
ある。青年期十七才にして志學(三〇段)の解説は爾學

者としての白石に大きな影響感化を与えた人物として本
下順庵を挙げ「生涯を通しての師であつたから各段で詳
述している」、師學への開眼者として中江藤樹を重視し
ている、二段で「文献による実証を盡けられてゐるが」
「究極的には『人家』^{あや}ければ則ち天に勝ち、天定りて亦能
く人に勝つ」という判断をもつていたようである」と云
う論証過程を、別著「新井白石の研究」はともかくとし
て、一般読者のために解説又は補説で展開されて欲しか
つた。十八次の時主家土屋家に内紛がおこり、新井父子
は浪人生活に入るが(三五段)、この浪人生活について
(三六段)の苦勞は、解説や補説三、浪人の体験と浪人
觀(二〇六頁以下)によつて充分に読者に理解せしめる。
白石の正徳の治も、かかる白石の浪人觀の理解がなければ、
とうてい鳥取の本領を見きわめることはむづかしい。
甲府侯綱豊の招聘により出仕するようになって白石の運
命は大きな転換を迎えた。二の四四段の解説は出仕の経
過について詳細に書きわよくなされてゐる。最初、加賀
前田家に仕官する予定を、友人にその職を譲つたため(一
四三段)甲府侯綱豊に仕えることになり、幕府に参列す
るようになった。白石の就職問題などは、私共の今日の
問題と共通している点におどろかされる。「この甲府家
からの就職口を断られは、今後も引続き就職について師
の配慮を頼りなくてはならない」という氣持が強く白石
をとらえていたことである」という見解は、白石が甲府

寮の特殊な地位（將軍繼嗣の第一候補）を考え、師順庵の不満を押しきつてそれを望んだとする解し方（例えば辻達也「新井白石の就職」日本正史一七九号）を否定するものである。白石の代表作として古史通・讀史余論・藩翰譜をそれぞれ古代史・中世史・近世史、斯らく柴の記を現代史というように考えられる。しかし学問的水準（當時における）の高いことは認めても、今日からみれば又詳細は変化する。そのような点から藩翰譜に見える家康の事蹟が全て妥当で、規範であるとする考え方は偏狭な論であると、著者は戒めている（四六段）。藩翰譜と本朝武林伝の關係についての論証は、書誌学的考察としてすぐれたものである。なお、一般に簡略に扱いがちな富士山の噴火（六十段）についても丁寧に解説されている。災害史上からも良き手引きといえよう。このようばゆきとどいた神経は六二段（秋）の天変世賦にも見られる。

以上のように巻上では、幼少、青年期の修養期から政治に参与するまでの基礎期間を扱ったものであるだけに、白石の學問、思想に大きな注意がはらわれている。

四、巻中

白石の政治生活でも家宣時代（甲府侯綱豊）が最も充実した時期であった。甲府侯へ出仕をし、綱豊と心の結びつきは巻上でも解説が詳しくなされているが（五、

大名家への出仕）、そのような信頼感が白石の才智を縦横に発揮させる根底となっている。白石の識見が家宣によって実現されたものに生類憐れみの停止がある（六八段）。白石の建議又は封事は江戸中期の政治・社会制度の研究に欠かせないものである。著者の解説も熱気を帯びて独自の見解に至るところで披露されている。皇子皇せ御出家廃止の献議（七七段）は白石自ら「此此国に主れて、皇恩に報いまいらせし所の一事也」というように、著者も白石の功績のうろで特筆すべきものの一つであると認めている。この中で白石の公武共榮觀について、幕府御用學者林鳳岡、佐幕論者荻生徂徠との間には明確な一線を劃される。という解説は史學史の上からも学ぶべき点が多い。次に「これ天下の大議をもて某に下し向われし御事の始也けり」という將軍居向の改益および金銀改鑄に反対（七一一段）は、貴金思想（一―二段解説）、降災思想と荻原重秀奸計の看破について触れている。貴金思想・降災思想は儒學に対する博識がなければ、貨幣（金）改鑄は天地の理法に背く、といった思考も理解できないし、荻原重秀彈劾に見せた白石の強硬な態度も理解し得ないだろう。まして長崎貿易制限の建議（一―二段）を単に経済政策としてしかとらえられないような単純な社会消史的史観は改めなければならぬ。そのような傾向に対する著者の警句である、と私は反省した。著者宮崎博士の經書史書の中国古典に対する博識の豊富

さは驚くばかりで、当然の事ながら儒學者白石の面目を如何なく再現して見せている。本書の特徴の一つをなしている。白石の家宣時代における主張の反映として寛刑主義がとられたことへ九入段越後国村上領の百姓訴訟問題、一二の段白石の建議と將軍の馳納一二三段大和川魚梁船濤論事件、一三九段近江国の土地争論事件、一四三段人身売買事件自分の進言、一四八段越後の盗賊処分に関する進言等々は白石の政治すなわち仁政としてとらえ、しかも一半の責任が爲政者の側にもあるという反省のとらえ方は興味がある。朝鮮使節の応待へ九五段へは外交史として見ても有益であるのは勿論、財政上、名分上の問題もある。「思うに、白石のいわゆる国体とは、現実にあるものではなくて、未だ実現されないもの、すなわち正史的現実の中に潜んでいる日本国のあるべき姿を指しているのであらう。だから、先例や旧儀を非常に重んじはするが、それらに常に拘束され、もしくは拘泥するというのはなく、場合によっては改革や革新をも必要と考える性質のものであったのではないかと思う。」（傍吳筆者）という見解は今日の意味でも興味のある問題であるだけに具体的な論を期待したいところである。将軍家宣と白石のコンビによる施政を典型的に示す事件として越後国村上領の百姓訴訟問題がある（九入段）。具体的には本書をみていたことにして、結果は「農村の實際―代官の不正、大庄屋の横暴、農民の窮状等が

同かになり、政治史的意義は大きかった。」「これらの判決は、支配者側に不利なもので、これ以後における農民一揆の目的の遠慮をつぐったという解釈もあるが、しかし爲政者に対する農民の信頼を回復、ないしは高めたいは無視できないところではあるまいか。」（三三三頁）「あるまいか」という希望的推測にとどめているが、農民の信頼の感情がどういう形で表現されてゆくのか、この章が幕藩制の矛盾解決の上で重要な示唆に富んでいるだけに読者としてはもっと解説して欲しいところである。なお近衛基熙日記に「大樹（將軍）御一応の慈悲を以て数千人一同、其の理に伏し、感涙を流した」と記し、「誠に大慈大悲の至り、感歎……」当時の政務、古今未曾有の善政、一々筆頭に尽し難し、脱ぐべし、脱しむべし」という賛辞を加えている。史料として示すし、著者の考え方は述べていないが、爲政者と被支配者とは考え方も異なるのであるから、公卿がどの程度農民感情に解れる機会があったか知りたところである。補説七、白石と夢は「夢はその人の精神状態の緊張弛緩、求道精神の強弱をはかるバロメーターと考えられたところから、儒者の面では夢を慎しみ、古であれば祝い（素行の場合など、良い夢は吉日にその夢を披露して家内にも御馳走を与えている。なお素行の日記には、友人や寺の瑞夢の記事まで収録されている）、凶であれば反省の材料とする」という風であったらしいが、簡略な日記においてこ

れが比較的克明に書きつけられているところから推すに、夢を重視した点では白石もその例外ではないようで、大いに研究の余地があるように思う（四百頁）という指摘は貴重である。

五、巻下（家継時代）

幼主服喪問題について（一八段）、改元反対の建議（一九段）の林信篤との論争は白石の學識を遺憾なく發揮した場面である。なお、解説（四三二頁）にて白石の思想家としての面を「要するに、國家社會の変遷推移や、家運、個人の境遇などが人爲により或程度変改され得ても、根本的には天命・天運によつて定まると判断していたものと思われるので、この奥白石は、忠実なる儒學の学徒であつたというべきであらう。合理主義的史學者白石には、こういう非合理的一面のあることを見逃してはならないと思う（白石の研究、第四編第四章、参照）」と冷靜に敘述されているのは合理主義的史學者宮崎博士のすぐれた見識であらう。既に述べたが、白石が寛刑主義をとつたといふことは、人情論としてのみでなく法理論として高度な水準の見識の故にであつた（一二〇段、獄事件に対する進言、解説）。このような解説が可能なのも博士なればこそである。白石は吉宗の將軍就任と共に政界から退くが、白石の事業は吉宗によつて完全に否定されなかつた（補説十二白石と吉宗）。改貨議の上

呈（一二五段）の解説は「八代吉宗の時にも引つゞき施行された政策として注目すべきものである」といくつかの向題を指摘している。今ここで取上げる余格はないので直接本書によられたい。補説では白石の論争相手であつた林信篤（風岡）について秀れた人物であつたことを詳述され、美臬は美臬として賞讃を惜しまない（五五八頁）。同じく白石の良き相談相手となつた室鳩巢について紹介もあり（補説十一、白石と鳩巢）、學者、政治家としての白石の実践面における交流を平易に説明されている。享保元（一七一六）年五月將軍家継歿し、吉宗が將軍職を継ぐに及んで致仕（辭職）した。一五一段將軍家継の死去に關し、吉宗登場のいきさつが詳しく述べられている。最後の段（一五二段）岡部詮房以下前將軍近習者の停職では側用人の起源を近習出頭人堀田正盛におき、それを承けるものとして綱吉の代の牧野成貞をとりに上げた白石の敘述に対し、近習出頭人と側用人は素諸的にいつても、性格を異にし出頭人は幕府制度成立過程に出現して完成と共に消え、側用人は固定した制度の矛盾の中から出現してきたもので、両者の面に結びつきは求められないという辻達也氏の説がある（「享保改革の研究」第二章）。宮崎博士は「『老中や若年寄の前身という一面をもつ近習出頭人』という、其の老中・若年寄は、本書にも見える通り、実は三代家光の時に制度化するのであるし、堀田正盛の場合、『はじめの程奉書連

判の衆になされ、程なく其事と定められ、御側にさぶらひて、老中の人々に仰せ下る。御旨をも、また老中の人々申すべき事など、此人に就て申されさしとあつて、後の側用人と全く同じ役割を果している事實である。白石の記述が誤っていないかぎり、老中や若年寄とは別にこういう職の必要が感ぜられたことから、正盛の「奉書連判の衆」をよとどめ、わざわざ側近において將軍と老中との間の取次をさせた存在、すなわち近習出頭人は側用人の起源に全くふさわしいものと認めざるを得ない。しと白石の説を支拂されている。白石が侍講として仕え、いわば將軍の相談役という立場であつて幕閣における政治的役職を占めたわけでないし、側用人としての側近政治家でもなかつた。それだけに側用人として権勢を振つた側近政治家の存在は白石にとつて重要である。博士は白石の政治活動の要ともなる詮房について八頁にわたる解説を付し、個人的にはともかく、政治の本筋においては、私利私慾のない両者の結びつきであつて、白石の詮房観も、いわゆる「大丈夫の白状」であつたと結論している。江戸時代政治史の上から、職制の上からこれからの研究者にとつて問題提起とならうか。

余説（晩年の白石）は著者の白石に関するエッセイといふべきもので、著者の筆も（叙）や（解説）から解放されて活潑自在である。(1) 学究的生活、(2) 生活環境、(3) 家族の動靜、(4) 交友關係に及んでゐる。栄光の座を降り

に白石晩年の心境が読者に深い感動を呼びおこす。著者の言葉を引用しよう。

「同時にまた私は、晩年の白石を学究の鬼として思いえなく。文筆の業を以て風雨の前に蜘蛛の網を結び候事の如くあわれ憐き事（あはれな事）という意識をもちつつも、精力削（さ）のんで史（し）の完成を急ぎ、死ぬ数日前まで采（さい）覧（らん）異言（いごん）に筆を加えていたという白石の姿は、全く異常と言うの外はない。そこには人力以上のものの働き、ゲエテのいわゆるデモオニッシュ（demonism）を想い得ざるを得ないのである。政治家としての白石は既に死に、詩人としての白石の生命は既に尽きていたが、学究者としての白石は遂に不死であつた。今日、その学究的業績が不朽であるのは、けだし当然のことであらう」。

六、

本書は、紹介してきたように「折々柴の記」の克明な評註であると同時に、白石研究、江戸時代史研究の懇切な手引の書とも云える。しかしそれだけに読者としての不満もある。（叙）の奥では読者から見て余りにも常識である言葉をとりあげたり（相模國、武蔵國青梅、つばさに、近習、秘候、馬場等々）、反対に説明の欲しい言葉に叙がなかつたり（家子一五四頁、等）、もっと詳細な叙が欲しいものもある（遊侠一あとこけて一六〇頁等）。索引についても人名、書名は詳しく、これを見れば

ばどのような所に力量がおかれているか一目瞭然であるが、事項索引は簡便すぎる。種々の事情で割愛せざるを得なかったことであるが、利用者にとっては不便であろう。以上のような事は、本書に期待するが故の望望の不滿であつて本書成立の爲め協力された関係者の努力を諒としなければなるまい。

本書のような長い年月と、学識・良心を傾注した古典註釈研究書が公にされたことは、学界の発展のために慶賀すべきことである。私が本書から教えられたことの一つは、歴史研究者としての宮崎博士の学問研究に対する眞摯な態度である。註釈は一応原典にあたり、一般に註釈されたものであれば、その旨を記し出典、責任の所在を明確にしている。近世史研究の基本図書として、徳川実紀、寛政重修諸家譜、御蔵書集成の三つがある。本研究会は地域的特殊事情から、歴史研究の中心は近世史にふかれざるを得ない（「弘前市史」の編集形態に如実に示されている）のであるから、上記の三書の外に、本書の利用価値ははかり知れない程大きいと考える。能力がないのにもかかわらず私が本書を評するのも、本書の価値を多くの人に知っていたにすぎないがためである。筆者の非才の故に蕪雜な文を重ね、著者の意図に反して紹介に終始し非礼をおかしたことと思うが何卒御海容あらんことを願って摘筆する。

（A5判、本文六二八頁、定価二、三〇〇円、昭和三十九年六月 至文堂刊）